

教職コラム 1

涙の数だけ強くなれる

山本 淳子

“You can take a horse to the water, but you can't make him drink.” 「馬を水辺に連れて行くことはできても、水を飲ませることはできない」ということわざがある。教育において、やる気を引き出せなくては、学習効果は期待できないということを表している。確かに、どんなに才能があっても、やる気がなければ成果は出ないだろう。どうしたら「やる気」は引き出せるものなのだろうか。そもそも、教師が引き出せるものなのだろうか。ある程度は可能であろう。しかし、最終的に「やる気」を起こすのは学習者自身であることに違いない。

自己決定理論という動機づけに関する理論では、「外発的動機」と「内発的動機」という分類が示されており、内発的に動機づけられた学習者の方が良い結果を出せるとされている。確かに「時間を忘れるほど英語の勉強が楽しい」という内発的動機によって学習に打ち込めば、その人の英語力は見違えるほどレベルアップするだろう。しかし、そんな状態がいつまでも続くとは限らない。勉強は苦しいし時間もかかるし、挫折もある。課題が多くて「やらされている感」を持つこともあるだろう。そんな内発的動機を阻害する状態の中でも、自分のために学習を継続できることこそが、学習成果を上げるうえで重

要な資質だと思っている。

「涙の数だけ強くなれるよ」というフレーズで始まる歌がある。何かの目標に向けて、必死に頑張っても、今一歩及ばず涙をのむことは、人生によくあることだ。その時、その失敗でやる気を失ってしまったら先には進めない。その失敗をエネルギーに変えれば、何回失敗しようとエネルギーが増して強くなるばかりである。私の周囲にも、7回目の挑戦で英検準1級に合格した学生や、1年生からTOEIC公開テストを毎回受け続け、卒業間際に目標の点数を突破した学生がいる。そういう人たちは、合格や高得点を得るとともに、悔しい思いをしながら努力を続けたことで、とてもたくましく成長している。

教員として、できるだけ授業を楽しく受けてもらえるような工夫をすることは忘れてはならないと自覚している。勉強は苦しいものだから、ということを使い訳に、学生に大きな負担を強いるようなことも避けなくてはならない。ただ、面白いと思えない(?) 反復練習、文法の復習などをコツコツと積み重ねる努力が、夢の実現には欠かせないということも伝えていきたい。そして挫折ほど人間を強くするものはないし、挫折の先には成功があるということ、学生と共に体感していこうと思う。

教職コラム 2

『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』から垣間見るイギリスのシティズンシップ教育

松尾 徹

3

この本はイギリス在住の 아일랜드人の父親と日本人の母親の息子が主人公である。この息子はイギリスのブライトン市の学校ランキング1位である公立のカトリック小学校を卒業した後、引き続きカトリックの中学校に進学すると思いきや、「元底辺」中学校に進学する。本書はその中学生活における初めの1年半の様子を見守っていた母親の視点から書かれてある。この本のタイトルはその息子が学校で色が象徴する様々な意味を学び、自分の事を表現してメモに走り書きした内容である。息子が中学生活で体験した出来事、それに対する母親や父親と息子のやりとりの日常生活を通して、イギリスにおける人種差別、ジェンダー、白人労働階級と上流階級との間の格差社会の問題などがよく理解でき大変興味深い。ここでは息子が授業で受けているシティズンシップ教育に焦点を当てることにする。

イギリスの公立学校では9年生からシティズンシップ教育が行われる。シティズンシップ (citizenship) とは日本語では「市民性」、「公民性」と訳される場合が多い。この教育の目的は変化がめまぐるしい現代社会において、子どもたちが将来、市民としての十分な役割を果たせるように知識、態度、スキルを体得させるための教育として、最近欧米諸国を中心に導入されており、イギリスでは80年代以降の深刻な経済不況により、若者の失業率が激増し、その結果将来への希望を失った若者たちの暴力、社会的無関心が重大な課題になり、将来を担う世代に社会的責任、法の遵守、地域とより深く関わる大切さを教育するためにカリキュラム化され導入されたようである。このような政治的な内容を11歳の子供たちにどのように導入していくのかというと、「empathy とは何かを書きなさい」というような問題で理解を確認するようである。この息子は「自分で誰かの靴を履いてみる」と書いて満点をもらったそうである。

その息子の教師が「EU離脱や、テロリズムの問題や、世界中で起きている色々な混乱を乗り越えていくには、自分とは違う立場の人々や、自分と違う意見を持つ人々の気持ちを想像してやるのが大事、つまり他人の靴を履いてみる。これからは empathy の時代だ」と説明したようである。

Cambridge English Dictionary で empathy を検索すると the ability to share someone else's feelings or experiences by imagining what would be like to be in that person's situation と書いてある。つまり、自分がその人の立場だったらどうだろうと想像することによって、誰かの感情や経験を分かち合う能力ということがわかる。この本の著者も書いているが、この能力は可哀想な立場の人や問題を抱えている人、自分と似たような意見を持っている人々に大して人間が抱く感情を意味する sympathy とは違い、訓練がある知的作業であると考えられる。私が英語力も大切だが、それ以上にこの能力が大切だと気がついたのは大学院で30ヶ国以上から来ている留学生と共にグループプロジェクトを行った時である。それを11歳の子供が学んでいるというのは凄いことであると思う。

日本の公民や社会科の内容は現代の問題を学び理解するところで止まっていることが多いのではないだろうか。総合的な学習の時間でシティズンシップ教育に近い取り組みをしている学校もあるだろうが、カリキュラムとして、系統だって実施されてはいない気がする。日本も経済格差、ニートの問題、若者の政治に対する無関心が課題として言われて久しいが、この本の中で行われているようなシティズンシップ教育から学ぶことが多いのではないだろうかと感じる。

・『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』

ブレイディみかこ(著)、新潮社、2019年